

2021年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	オノマトペに対する幼児の定型的な身体表現と自分なりの身体表現 ー保育者の用いるオノマトペと自由遊び中のオノマトペに着目してー
キーワード	①オノマトペ、②幼児、③身体表現

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ムラセ ルミ 村瀬 瑠美
配付時の所属先・職位等 (令和3年4月1日現在)	千葉敬愛短期大学 現代子ども学科 専任講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	千葉敬愛短期大学 現代子ども学科 准教授
プロフィール	6歳からクラシックバレエを始める。筑波大学体育専門学群において、体育学のほか、学校ダンス、創作ダンス、コンテンポラリーダンスなど、様々なダンスを学ぶ。卒業後、同大学院で体育学修士、幼児の身体表現の研究でコーチング学博士を取得。子どもたちへのダンス指導、体操指導は高校1年生から始め、現職につくまで約9年間続けた。現在は保育者を目指す学生に体育や身体表現を教えている。

1. 研究の概要

本研究は、幼児のオノマトペに対する「定型的な身体表現」と「自分なりの身体表現」の違いを生み出す要因を、保育者が用いるオノマトペへの反応と、自由な遊びの中で幼児が用いるオノマトペを観点に考察することを目的とした。本研究の対象者は同じ幼稚園に通う5歳児(年長児)であり、対象者に対して観察を行った。まず、観察対象となる、オノマトペに対して「自分なりの身体表現」をする傾向のある対象者(以下、「自分なりの身体表現をする対象者」と、「定型的な身体表現」をする傾向にある対象者(以下、「定型的な身体表現をする対象者」)を選ぶために実験を行った。実験の結果をもとに、自分なりの身体表現をする対象者2名(A・B)定型的な身体表現をする対象者2名(C・D)の、計4名を選定した。次に、対象者4名の園での自由遊びの様子を観察するために、対象者の様子を個別に映像記録した。総撮影時間は5時間47分であった。得られた音声・映像記録を質的分析ソフトMaxqda2020で対象者の発話や行為をコーディングし、コードの生起頻度の比較考察や特徴的なコードが出現した場面の事例分析を行った。なお、新型コロナウイルスの影響から、観察回数や観察場所などについて、当初予定していた計画を縮小して行った。

結果から「定型的な身体表現」と「自分なりの身体表現」の違いを生み出す要因として、「回復するリズムカルな動きと発話のリズムの関係」「自由遊びの中での何かになる動きの経験」「自由遊びの中での身体活動量」が考えられた。

2. 研究の動機、目的

身体表現中の保育者の言葉かけは、幼児の身体表現をより豊かに導くための重要な要素の一つである。身体表現活動においては、保育者の言葉は幼児のイメージを広げ、深め、多様で

豊かな動きを導くようなものでなければならず、そのためによく用いられているものの一つにオノマトペがある。筆者は幼児の身体表現活動における保育者の用いるオノマトペが幼児に想起させるイメージと動きの関係やあらわれる動きの傾向について研究してきた。オノマトペは幼児のイメージや動きを豊かにすることができるとされているが、筆者の以前の研究の中で、あるオノマトペに対して、創造性の高いオリジナルな動きをする幼児と、「定型的な身体表現」をする幼児が見出された。ここから、ただオノマトペを用いても、必ずしも幼児のイメージや動きが豊かになるわけではないことが明らかとなった。また、5歳児頃から「定型的な身体表現」をする幼児が増えてくると言われている中で、「定型的な身体表現」をした幼児と同じ園に通いながらも、創造的でオリジナルな表現をする幼児がいたことは詳細に検討されるべきである。なぜなら、保育者は幼児の身体表現が定型化せず、一人一人のイメージが多様な動きとして身体にあらわれるように、身体表現を導かなければならないからである。

しかし、幼児の「定型的な身体表現」が「自分なりの身体表現」へ変化するような保育者の言葉かけを検討するためには、まず、「定型的な身体表現」をする幼児と「自分なりの身体表現」をする幼児を比較検討し、「定型的な身体表現」と「自分なりの身体表現」の違いを生み出す要因を検討しなければならない。そこで、本研究では、5歳児を対象に「定型的な身体表現」をする幼児と「自分なりの身体表現」をする幼児の園での生活を観察し、オノマトペに対する反応や、自由な遊びの中で用いるオノマトペの傾向を調査し、オノマトペに対する「定型的な身体表現」と「自分なりの身体表現」の違いを生み出す要因を、保育者が用いるオノマトペへの反応と、自由な遊びの中で幼児が用いるオノマトペを観点に考察することを目的とした。

3. 研究の結果

本研究では大きく、以下の3点が知見として得られた。

- ①定型的な身体表現をする対象者と自分なりの身体表現をする対象者間で、保育者の用いるオノマトペに対する反応には、有意な差は見られなかった。
- ②自分なりの身体表現をする対象者はどちらも、自分のイメージを動きにする、何かになる動きや遊び（模倣やごっこ遊びなど）を好んで行い、イメージを動きで表現することが得意であると考えられた。自由遊びの中でオノマトペをよく用いているのは対象者Aのみであった。対象者Aは、自由遊びの中で「跳ねる・はずむ」「ゆれる」といった反復するリズムカルな動きを多く行っており、「リズムカルな発話」や動作の「効果音」なども多く見られた。オノマトペの持つ音の反復や、促音・撥音などによって作られるリズムへの感受性と、繰り返しのよって生まれる動きのリズムには関係があると考えられた。対象者Bは自らオノマトペを発することは少なかったが、言葉の理解力や、言葉で自身のことやイメージした状況を説明する力が高く、言葉のイメージを動きにすることができている様子が多く見られた。また、対象者Bは自由な遊びの中での身体活動量が最も多く、身体をイメージ通りに動かすことが得意であるために、自分なりの身体表現をすることにつながると考えられた。
- ③定型的な身体表現をする対象者CDはどちらも、言葉の理解力や、言葉で自身のことやイメージした状況を説明する力が高いと考えられた。対象者Cは、自分のイメージを動きにする、何かになる動きや遊びを観察期間中は一度も行わなかった。対象者Cは何かになることをしないために、自分なりの身体表現が育まれる機会が少ないと考えられた。対象者Dは、自分のイメージを動きにする、何かになる動きや遊びを多く行っていたが、身体活動量が少なく、身体全体を使って表現する姿はあまり見られなかった。

以上の結果から、「定型的な身体表現」と「自分なりの身体表現」の違いを生み出す要因として、「反復するリズムカルな動きと発話のリズムの関係」「自由遊びの中での何かになる動きの経験」「自由遊びの中での身体活動量」が考えられた。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究で幼児の「定型的な身体表現」と「自分なりの身体表現」の違いを生み出す要因が明らかとなった。この要因は、日常保育の中でどのようにアプローチしていけば、幼児のより多様で豊かな身体表現を育むことができるのかを検討するための重要な観点となると考えられ

る。幼児がオノマトペだけでなく、ある対象に対して自分なりに感じ取りイメージを広げ、自分なりのやり方で表現できることを育み伸ばすことができれば、身体表現のみならず、幼児のその後の人生に良い影響を大きく与えられると期待する。よって、筆者は幼児のその後の発達過程も視野に入れ、本研究結果をもとに、今後は幼児の自分なりの身体表現を育む具体的な方策を検討したい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、私の研究に対してのご支援、誠にありがとうございました。支援をしていただいたことで、新たな分析方法（質的分析ソフトによる解析）にチャレンジすることができ、今まで焦点を当てられなかった角度からデータを見ることができました。また、新たな知見を得られ、研究者として次のステージに進み、社会に知見を還元している実感を得ることができました。得られた結果は学术论文に投稿中であり、学会発表も予定しています。

本当にありがとうございました。支援していただいたことを忘れず、研究にさらに精進し、社会に貢献できるような成果を発表していきたいと思えます。